内容

創価大学全学読書運動・Soka Book Wave（SBW）は、2004 年度より図書館と学生諸団体が協力して実施してきた、全学的な読書運動。創立者が提唱する「活字文化復興」を実現するため、創価大学、創価女子短期大学から「読書の波」を起こそうとの学生の熱意で始まった。SBW は学生有志と図書館職員で構成する Soka Reading Project（SRP）が企画・運営し、広報活動、展示企画、創大祭での読書展、特別講演会の開催など精力的に活動をしている。

参加対象は、創価大学の学部生と別科生、留学生、創価女子短期大学の学生。参加希望者は、SBW の WEB サイトで新規ユーザー登録を行う。ログイン後、開催中の SBW にエントリーを行い、読書した図書の感想文やショートレビューを提出。それらを大学院生が確認し、間違った表現などがあれば、丁寧にアドバイスを行う。大学院生の確認・承認が終了すると、1 件につき 1 ポイントが付与され、5 ポイント毎に図書カードを 1 枚進呈する。

この他に、教育学習活動支援センター（CETL）が主催する学習セミナーに参加して SBW のポイントを獲得する制度など、多様な取り組みを行う中で、学生の読解力、文章力を向上させる取り組みとなっている。

概要

対象者：学部生、別科生、留学生、女子短期大学生
実施期間：2013 年 4 月～2014 年 1 月
実施場所：SBW 専用 WEB ページ上
担当職員数：3 名
スケジュール：

10 月	読書展（大学祭「創大祭」期間中に中央図書館内で開催）
不定期	特別講演会
不定期	企画・展示（様々なテーマで本を紹介）
月ごと	SBW アワード（月間アワード対象図書について優れた感想文の提出者を表彰）

2010 年～2012 年（終了）

選書ツアーを年 1～2 回開催。学内で事前説明会を開催し、後日紀伊國屋書店 新宿南店で開催。図書カード 2000 円分を贈呈。

きっかけ

発案者：図書館事務室

創立者池田大作先生が 2004 年 1 月に来館。読書に関する箴言を多数いただき、そのうちの 5 つを図書館指針として制定。「読書は黄金の輝き　読書は勝利者の源泉　読書は幸福の伴侶なり　読書は偉人への道　良書を読め悪書を叩けそれが正義の人なり」

また、2001 年～2003 年にかけて、「文字・活字文化復興」に関する創立者池田大作先生の寄稿文が地方新聞等に掲載された。これらの事から、当時大学の様々な学生団体等が、様々な読書運動を展開していた。それを、図書館が中心となって「全学読書運動」として統一した運動をつくろうということで、SBW（初年度は読書マラソン）をスタートさせた。

開始にあたって

準備期間：約 3 ヶ月

準備の概要：最初は、参加カードへ感想文提出印をスタンプする形であり、用意するものは感想文用紙と参加カード、提出印くらいであった。後年 ICT を活用した読書運動へ徐々に発展した。2 月から 3 月にかけて、システムの改良やルールの見直しなどを行なっている。本年度、専用システムの全面リニューアルを実施。

広報：掲示物（館内）、チラシ（館内）、デジタルサイネージ（館内）、図書館 HP、メール、学内印刷物への記事掲載、専用 WEB ページの開設、新入生ガイダンスで告知、館報でお知らせ

費用・用途：1,415 万円

（今年システムのリニューアルをした為、1,260 万円の予算を計上。それ以外の通常の運営費は 155 万円。主に図書カード 50 万円、感想文添削業務委託費 50 万円、消耗品（展示などの作成）50 万円、その他講演会講師謝礼など 5 万円。）

苦労したこと・工夫したこと

- SBW の推進団体 Soke Reading Project の活動を推進するため、専用の部屋を図書館内に設置した。
- 読書展は、当初図書館職員も総出で大規模な設営を行なっていた。図書館職員の激減に伴い、レンタルの展示パネルを採用した。
- ICT を活用したシステムとした際に、提出した感想文は、図書館スタッフの承認を条件としてポイント付与をすることとした。当初は、図書館員が担当して添削していたが、現在は大学院学生を募集して、1 通毎に金額を設定して業務委託契約を結んでいる。

始めてよかったと思うこと

- 図書館の貸出冊数の増加傾向から、学生の読書量の増加に繋がったと分析している。図書館での各種イベントによって、図書館の入館者数も大幅に増加した。感想文の添削サービスを実施しているが、担当スタッフは非常に丁寧に対応しており、学生の文章力向上に貢献していると考える。

今後の課題は…？

2006 年 2007 年と 2000 名を超えていたエントリー数（学生数約 8000 名）が、ここ数年 500 名前後になっている。学生アンケートによると、授業外の学修時間は増加している傾向にある。読書運動に割く時間が少なくなってきているのかもしれない。

エントリー数・感想文数とも今後如何に増やしていくか、魅力あるサービスを構築する事が必要である。どんなサービスも、続けると学生の興味が薄れるようである。絶え間ないサービス改善が、参加数を増やす事に繋がると考えている。しかしながら、あまりに複雑すぎた新企画が失敗したこともあった（チーム対抗の取り組み Doku☆ラリー）。

解りやすく、シンプルで、取り組みやすい運動を、今後も企画していきたい。

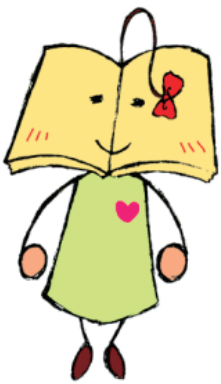
伝えたいこと

学生の学習意欲は想像以上に高い。そのニーズに応えられるサービスとすることが重要。その為に、学生自身にサービスの在り方を聞きながら、実際に運営にも携わってもらう形が望ましい。

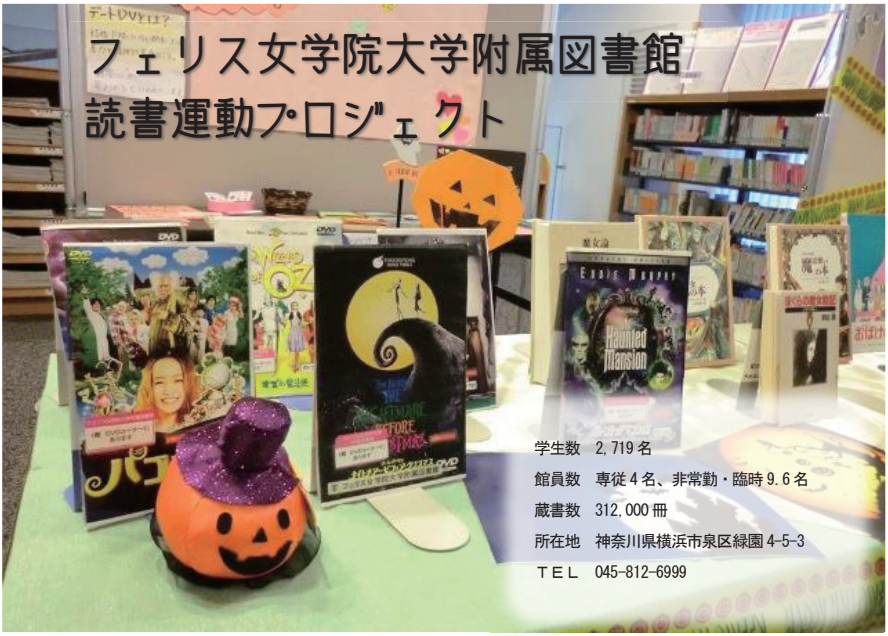
本学では、当初無理のない形でスタートし、年々運動を進化させてきた。その過程で、学内の評価も上がり、さらに学外の評価も得て私立大学図書館協会賞の受賞に至った。最初から複雑にせずに、自館でできる範囲から進めることが重要だと考える。

当初、予算の心配もあったが、図書カードは財務部に寄付者から頂いたものが大量にあり、財務部では有効活用法を探していた。また、教育・学習活動支援センター（CETL）とのコラボレーション企画（文章表現法などの課外講座）は、その後館内での大学院生 TA による学習相談窓口の設置につながった。

学内の関連部署の教員・職員と交流を重ねるなかで、自分の大学でしかできないサービスが可能となるのではないでしょうか。



フェリス女学院大学附属図書館
読書運動プロジェクト



学生数　2,719 名
館員数　専従 4 名、非常勤・臨時 9.6 名
蔵書数　312,000 冊
所在地　神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3
ＴＥＬ　045-812-6999

内容

大学生の「読書」を推進するため、毎年テーマを決めて「読書会」を行う他、読みを表現する「朗読会」、「POP コンテスト」、「創作コンクール」などを定期的に開催する。

また、大学祭ではテーマに関する展示やクイズ、ブックカバーを製作するワークショップなどを開催し、参加対象を地域にも拡げている。

学生プロジェクトチームのメンバーとして、学部生と大学院生が参加している。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員、卒業生、地域住民、オープンカレッジ生
実施期間：2002 年 4 月～
実施場所：図書館
担当職員数：2 名
スケジュール：

- 読書会：年に 3 回程度、学生の昼休みに開催。内 1 回は、その年の読書運動科目を担当する教員を講師として招いて、ナビゲータをしていただく。
- 朗読会（学内）：講師を迎え、週に 1 回 90 分のレッスンを行い、朗読チームとして活動し、大学祭で朗読会を開催する。午前に準備とリハーサルを行い、午後に朗読会を実施。
- 朗読会（学外）：神奈川近代文学館と共催で、近代文学会で朗読発表会を年 1 回開催する。2012 年度は事前に会場を借りてリハーサルを行い、当日は、午前中に準備とリハーサル、午後に朗読発表会を実施。
- 大学祭：2 ヶ月程前から今年のテーマに即した展示発表準備を始め、前日に展示その他の準備をする。当日（2 日間）は展示発表、クイズ、ワークショップ等を実施する。

きっかけ

発案者：2002 年度の一人の図書館運営委員（教員）

アメリカの新聞に掲載された、シカゴ市で成功した読書運動の記事を読んだ教員が、本学でも同様の読書活動を全学的に展開できないかと提案したのがきっかけ。おりしも 2001 年 5 月に 5 階建ての独立棟

として図書館が新築オープンし、格段に環境が向上した図書館で何か新しい試みをしようという熱意が高まり、読書運動に取り組むことになった。

開始にあたって

準備期間：約 6 ヶ月

準備の概要：発案した教員と、各学部の図書館運営委員 1 名ずつ、図書館職員 1 名の計 5 名のプロジェクトチームを作り、テーマとする一冊の本の選定や、運動の展開の手法を話し合った。また、拠職上の図書館運営委員でもある大学事務部長が、この企画が非常に先進的でユニークであるとして賛同し、即学長に相談の上、300 万円の予算を取り付けてくれた。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内・館外）、デジタルサイネージ（館外）、図書館 HP、プレスリリース、メール、学内印刷物への記事掲載、公共図書館へのポスター送付

費用・用途：年間 300 万円程度（ポスター報告書、作品集等の印刷・広報費約 100 万円、講演会講師謝礼・朗読講師謝金等約 40 万円、臨時職員（専従）人件費約 130 万円、軽読書用文庫本　約 30 万円）

苦労したこと・工夫したこと

- 読書運動を図書館だけのものでなく、全学的なものとしたこと。学内で行われる他のイベントやプロジェクトとテーマを連携させて、読書への多角的な動機付けを行った。たとえば学部が主催した国際会議のテーマを取り上げて、展示会（図書だけでなく、写真展、美術展など）や上映会を行った。また、基礎教養総合課題科目に読書運動の正規科目を設け、毎年のテーマを授業で扱った。
- 学生のプロジェクトチームを作り、学生の発案による企画や PR を行ったこと。各種イベントの実施を学生中心に行った。
- テーマを多角的に展開したこと。１冊の本がテーマになるが、その文学的側面だけでなく、作品の主題や背景を多角的にアプローチする企画を行った。社会問題を扱った作品では、弁護士や、NPO 法人の方などの講演会や、写真展など、１冊の本から更に関心が広まる企画を実施した。
- 読書をきっかけにした、学生の自己表現への飛躍を目指した。随想コンクール、創作コンクール（詩、小説、戯曲）、読み聞かせ、朗読、朗読と音楽演奏のコラボレーション、作曲など、読書によって得たインスピレーションを、創造や他者に伝える表現へ発展させる企画を行った。
- 学内にとどめず、広く読書の環を広げるという趣旨で、講演会、朗読会などのイベントを学外公開した。横浜市の読書推進プロジェクトとも連携し、合同でイベントに参加したほか、地域の保育園での読み聞かせや、文学館との共催で学外のホールで朗読会を行っている。
- 文部科学省の補助金を獲得し、補助期間中は費用の大部分を賄った。

始めてよかったと思うこと

- カリキュラム支援が中心であった大学図書館にあって、読書をクローズアップすることで、従来所蔵していなかった現代作家の作品を読書用の文庫本として大量に購入した。多くの学生に読書を楽しんでもらえるようになり、貸出冊数が増加した。また、一冊の本をテーマとすることで、これまで関心の無かった分野にまで読書傾向が広がっていった。
- 読書を発展させ、創造的な活動にまで広げたことで、学生の潜在的な能力を引き出すことができた。
- 一部ではあるが、教員や他課の職員と連携した活動が行えている。

今後の課題は…？

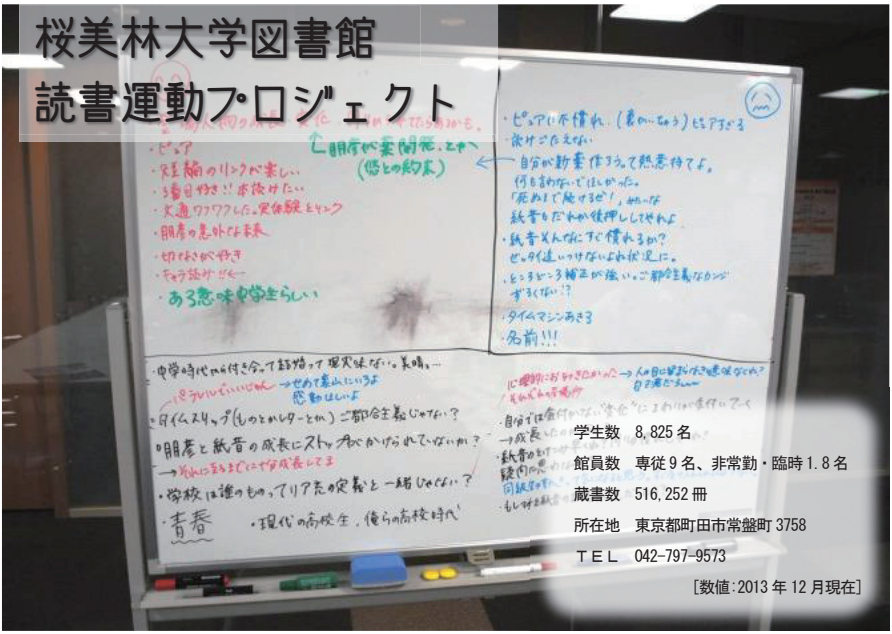
- コンテストやコンクール応募者のさらなる拡大への模索。
- プロジェクトチームの学生たちの主体性をどう引き出していくか。
- より多くの学生を巻き込むためにはどのような方策があるか。

伝えたいこと

本学の読書運動の意図は、不読者層に働きかけて読書の環を広げることであるが、あらゆる動機付けを行い、ある程度は成功したと思う。しかし、その主な企画は、「読書会」「随想コンクール」「創作コンクール」「朗読」「読み聞かせ」など、もともと読書が好きな学生たちの意欲をより引き出すといったものが多かった。大学の読書運動としては相応しいともいえるが、“不読者層の開拓”としてはハードルが高かったのではないかと思う。加えて、これらの運営にかかる職員の労力は膨大なものである。

読書の裾野を広げるためには、もっと軽い気持ちで楽しく、遊び感覚でできるサークル的な活動をすること、そして、学生たちが活動しているところを他の学生に見せること、面白そうだと思わせることが必要だと思う。そのためにも、スタッフは柔軟な発想で試してみること、あまり効果が見られない場合は、角度を変えてアプローチしてみるなどの工夫や切り替えが大切だと思う。

桜美林大学図書館
読書運動プロジェクト



学生数　8,825 名

館員数　専従 9 名、非常勤・臨時 1.8 名

蔵書数　516,252 冊

所在地　東京都町田市常盤町 3758

ＴＥＬ　042-797-9573

［数値：2013 年 12 月現在］

内容

学生、教員、図書館、大学生協の 4 者協同による読書推進運動。基本的なスタンスは、学生たちの自主性を尊重。学生たちが図書館という場を使って図書の紹介、読書会開催など、図書や読書に関する企画を立案、実行し、読書の楽しさ、面白さを学生の視点からアピールすることにより、大学図書館全体を盛り上げていく。

概要

対象者：学部生、大学院生、教職員

実施期間：年度ごとに実施

実施場所：図書館。イベントの場合は教室、ホールなどで行う。

担当職員数：2～3 名

スケジュール：

4 月～12 月、1 月～3 月：新入生勧誘。

図書館内に推薦図書コーナー設置（年 3～4 回）。

11 月：読書マラソン桜美林コメント大賞選考会。

12 月：桜美林コメント大賞授賞式＆作家をゲストに招いてのトークイベント。

1 月～3 月：年度報告書作成・発行。

その他日常的な作業として、読書会、大学生協読書マラソンコメント募集 PR 活動などを行う。

きっかけ

発案者：教員～図書館メディアセンター

2005 年秋、現在も活動の核となっている教員から、当時の図書館長に、現在の図書館読書運動プロジェクトの原案が提示され、図書館長から現場に実現に向けた具体化の指示がなされた。図書館としても学生の読書離れを食い止め、図書館利用促進のきっかけになることを期待し、翌 2006 年度から活動を開始した。

開始にあたって

準備期間：約 3 ヵ月（4～5 月に開始するとして、前年度の 1～2 月頃から準備を始める。）

準備の概要：目標設定とそれに至るまでの企画立案。学生、教員、図書館、大学生協 4 者の関わり方について模索。特に大学生協で展開されている『読書マラソン』のコメントカードを活用し、貸出冊数だけではない「読書のコメント数」を数値目標

として掲げることにした。

広報：掲示物、(館内・館外)、チラシ（館内・館外）、図書館ホームページ、Facebook、twitter

費用・用途：20万円程度（イベントゲスト謝礼5万円、報告書印刷費 10 万円、その他活動費（消耗品など））

苦労したこと・工夫したこと

学生の組織化と活動の継続が最大のポイントかつ苦労している点。初期は教員のゼミや授業、そこから派生した読書サークルを母体にしていた。しかし、組織化や継続性がうまくいかないことも多々あり、現在は上記4者からそれぞれ委員が出て関わるという委員会制度を採っている。工夫したというわけではないが、大学生協の協力や、大学生協が持っている学生の組織化のノウハウに助けられたところは多い。

始めてよかったと思うこと

この運動に参加する読書好きの学生たちが、読書をキーワードとして様々な企画を立て、計画し、最終的に年末のコメント大賞表彰式や読書イベントを行うという経験をすることにより、大きく成長していく姿を見ることができる。オススメ本企画など、大学図書館の運営の一翼に学生が関わることで、大学図書館に興味や親しみを持つ学生が増えてきている。

今後の課題は…？

毎年の課題だが、学生が読書を通じて成長し、考えの幅や視野を広げ、読書会などの経験を通して「個としての読書」から「共有する読書」の楽しさや重要さを発見してもらいたい。

伝えたいこと

学生との協同を続けていくためには、とにかく学生の組織化と指導、継続が重要です。もう7年ほど続けてきましたが、今では運動を続けていくにあたり、学生たちに

①読書運動プロジェクトは遊びではない（でも遊びの要素は重要！）

②まじめに楽しくやる（仕事じゃないので）

③必ず新人を入れる（次に続ける意味でも大事！）

④スケジュール管理は学生がする

⑤イベントの企画、準備、運営、総括は、そのほとんどを学生たちがする（大人は、予算は出すけどできるだけ口も手も出さない）

と言うようになりました。

運営を続けていくためには、できるだけ学内で協力者を確保することが重要です。本学の場合で言うと、読書会の指導や運営、イベントの組み立てについては教員が、他部署への協力依頼の方法、企画書、依頼状、礼状等の書き方など事務的な指導については図書館員が行っています。大学生協は、店舗書籍売り場のコーナー設置、イベントゲストへのコンタクト等で協力してくれています。

図書館員が積極的に学生たちと関わりを持ちつつ、基本的には学生たちの意思を尊重し、時にはあえて失敗させるなど、図書館の本務業務をこなしながら面倒を見るのは大変ですが、学生たちが成長していく姿を見るのはとても楽しいものです。

嘉悦大学情報メディアセンター
図書館学生スタッフLiss
（Library Student Staff）

学生数　1,382名
館員数　専従1名、非常勤・臨時3.0名
蔵書数　86,000冊
所在地　東京都小平市花小金井南町2-8-4
ＴＥＬ　042-466-1712
［数値:2013年12月現在］

内容

図書館のアルバイトスタッフとして、貸出・返却、返本、資料の装備等の業務や、広報活動を行う。図書館においての課題を発見し、解決することによるキャリア形成を目的としている。広報活動としては、今までに、館内での企画展示コーナーの設置、図書館新聞の発行、ブログ、twitter、facebook での広報、古本市、ビブリオバトル、選書ツアーの実施、図書館ツアーの実施、利用案内動画の作成等を行っている。

概要

対象者：学部生
実施期間：2007年5月～
実施場所：主に図書館
担当職員数：2名

きっかけ

発案者：情報メディアセンター図書グループ

2006年当時、入館者数、貸出冊数が減少傾向にあり、通常の広報活動だけでなく、学生を取り込んだ形での広報活動をするために、まずは図書館ボランティアを募集した。図書館ボランティア活動では、選書ツアーの実施、学園祭での古本市の開催、企画展示コーナーの設置などを行った。2007年に学内での雇用創出による大学活性化のために、アルバイトスタッフの雇用を開始した。2007 年からは、「働ける大学」をキャッチフレーズに実践的なキャリア経験、半学半教実践の場として、全学的に学生の雇用を開始し、図書館もその一つとしての活動を行っている。

開始にあたって

準備期間：約12ヶ月
準備の概要：業務内容の検討、予算の確保、アルバイト募集、面接、採用、研修、業務管理
広報：掲示物（館内・館外）、Facebook、twitter、メール、学内専用サイト

苦労したこと・工夫したこと

学生自身が課題を発見し、解決しながら職業経験を積むことによるキャリア形成をメインとしている

ので、まずは課題を発見し、ミーティング等で解決方法を検討、企画書を書いて実行するというプロセスを踏んで企画を行う。これらを実施するために、随時職員がアドバイス等を行っており、かなりの労力をかけている。

始めてよかったと思うこと

アルバイト学生の成長としては、利用者や職員と関わることによるコミュニケーション能力の向上、課題発見や解決能力の向上、企画書等の書類作成スキルの取得、ミーティング等における会議力やリーダーシップ能力の向上が挙げられる。積極的に業務に関わることにより、学内だけでなく学外との交流を望むようになり、他大学の図書館学生アルバイトスタッフやボランティアスタッフとの交流や図書館総合展でのポスターセッションへの参加など、活動範囲が広がっている。

図書館運営においては、図書館のサービスに詳しい学生が増えることによって、他の学生へもサービスが伝授されることによる利用者の増加が挙げられる。同じ企画を行っても、職員が行うよりも、学生が行ったほうが教員や学生に対する注目度や影響が大きい。学生目線での広報誌の発行や企画棚の作成により、企画本の貸出冊数が増加した。

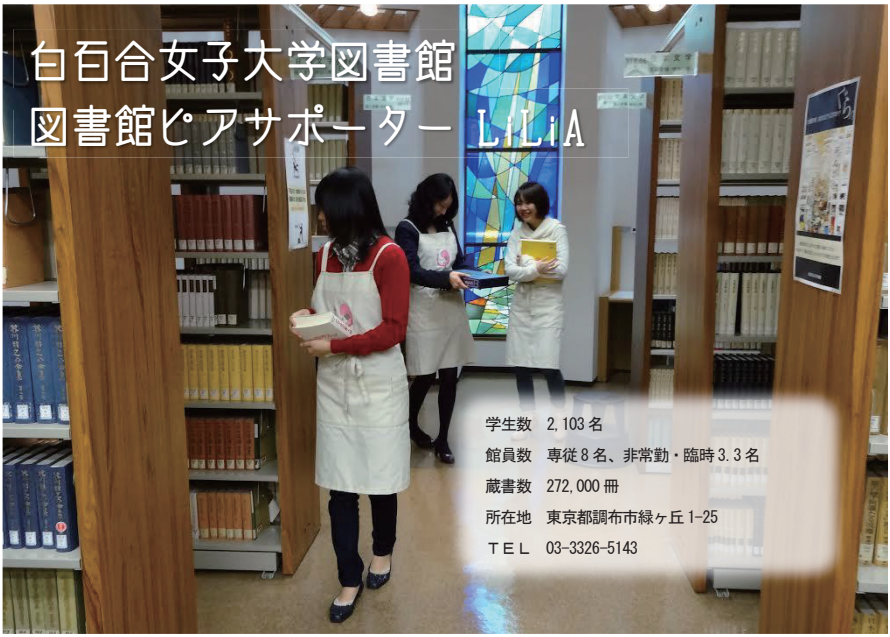
今後の課題は…？

現在アルバイト学生が 12 名いるが、通常はカウンターでの 1 人勤務なので、全員が集合する機会が少ない。月 1 回の全体ミーティング、長期休暇（夏期および春期）に行う一斉勤務やミーティングの機会を設けているが、個々の仕事を把握することが難しい。長期休暇期間に前期の反省および次期の目標を明確にして、通常の勤務を行っていきたい。卒業や退職により、定期的に学生アルバイトの入れ替えがある。人員の増減によってサービス内容が変化するので、リーダーを中心とした学生および職員で、業務の調整を行う必要がある。

伝えたいこと

通常の業務を行うのであれば、学生でないアルバイトを雇用したほうが管理は楽だと思います。また、部署内、部署外の調整や予算の確保も必要になります。大学や図書館のミッションと照らし合わせて考えたときに、学生とともに働くことでそのミッションがより効果的に遂行するのであれば、学生と一緒に働くのは楽しいので、ぜひお勧めします。

白百合女子大学図書館
図書館ピアサポーター LiLiA



学生数　2,103 名
館員数　専従 8 名、非常勤・臨時 3.3 名
蔵書数　272,000 冊
所在地　東京都調布市緑ヶ丘 1-25
ＴＥＬ　03-3326-5143

内容

学生がピア（仲間）として、主な利用者である学生を支援するサポーターとなる制度。

館内見回りでは PC とその周辺の整理やキャレルの整頓、書架整理を行う。また、利用者の質問・問い合わせの最初の窓口となり、回答可能な適切なところへ案内する。

図書館ツアー、選書ツアー、リエゾン講演会などの図書館イベントの手伝いを行うほか、すべての活動を LiLiATimes というフリーペーパーにまとめている（年間 2 回発行）。

LiLiA は、Library Liaison Assistant の略であり、Liaison はフランス語でつながるを意味する。

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2010 年 10 月～
実施場所：図書館内
担当職員数：2 名

きっかけ

発案者：図書館事務部

図書館長より提案のあったピアサポーター構想を図書館で導入することになった。学生と図書館とを学生がつなげる役割を持つ、ボランティア組織を形成したいと考えた。

開始にあたって

準備期間：約 6 ヶ月
準備の概要：
- 他大学図書館見学
- コンセプト決定
- キャラクターコンペ

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、図書館 HP
費用・用途：7 万円程度（メンバー用のエプロン）

苦労したこと・工夫したこと

設立当初はコアメンバーの確保に苦労した。

始めてよかったと思うこと

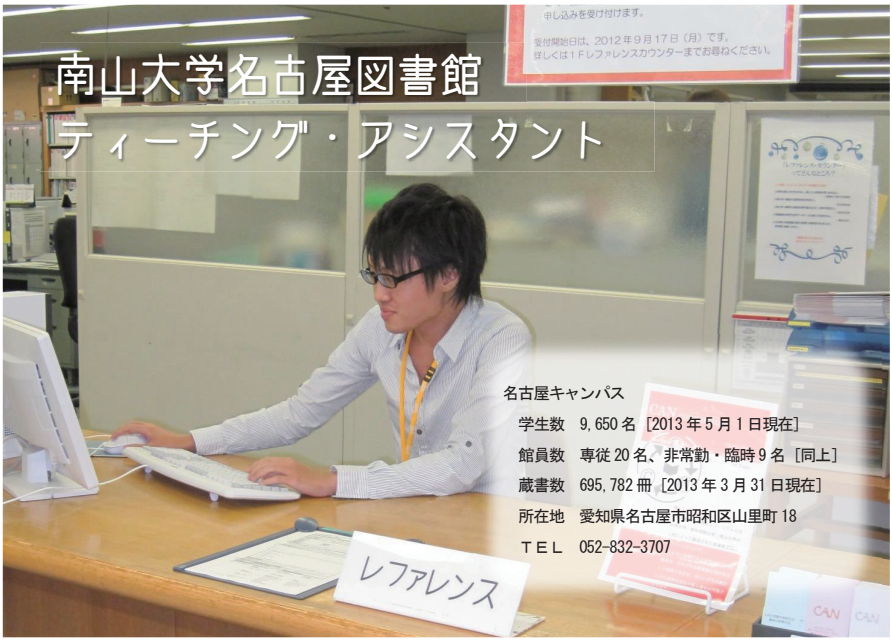
・図書館をより深く知りたい学生や、司書資格取得を目指す学生に、図書館を一層気に入ってもらえること。
・図書館をより使いやすくするためのさまざまな指摘をしてくれること。

今後の課題は…？

上級生が下級生を引っ張るような自立した組織を目指しているが、まだその段階になっていない。そのために担当職員が活動の指揮をとっている。

伝えたいこと

活動意欲を損なわないように、常に新鮮で、学習できる活動を目指してください。



南山大学名古屋図書館
ティーチング・アシスタント

名古屋キャンパス
学生数　9,650 名［2013 年 5 月 1 日現在］
館員数　専従 20 名、非常勤・臨時 9 名［同上］
蔵書数　695,782 冊［2013 年 3 月 31 日現在］
所在地　愛知県名古屋市昭和区山里町 18
ＴＥＬ　052-832-3707

内容

院生によるティーチング・アシスタント。サービスの提供（レファレンスや図書館利用講習会）。

概要

対象者・実施場所：すべての利用者（レファレンス・カウンター）、学部生・教員（図書館講習室）
実施期間：2012 年 4 月～

きっかけ

発案者：図書館事務課閲覧・参考係
講習会講師の人手不足解消、および、ラーニング・コモンズ構想を見据えた人材確保のため。

開始にあたって

準備期間：約 1 ヶ月
準備の概要：
・大学院生の募集、採用、雇用手続
・図書館利用講習会講師としての事前研修を 6 日間（延べ 78 時間）実施
広報：掲示物（館内）、図書館 HP、学内印刷物への記事掲載
費用・用途：院生 TA（2012 年度 3 名、2013 年度 5 名）を雇用する人件費

苦労したこと・工夫したこと

苦労した点：ティーチング・アシスタント（TA）のスケジュール調整
工夫した点：
・すべての TA ができるだけ均一なサービスを提供できるように職員がサポートを行っている（TA の作成資料のチェック、受講者アンケートの確認等）。
・研修終了時のプログラムとして模擬講習会を実施し、資料の作成をはじめとする講習会準備や、実際の講師ぶりについて、職員の講評を受けたうえで本番に臨んだ。

始めてよかったと思うこと

・職員とは異なる視点や、学部生との距離感の近さが充分に活かされた講習会を実施することができた。

・院生の専攻分野と関連性の強い学部学科の講習会を担当してもらうことにより、受講者および教員から高い評価を得ることができた。

今後の課題は…？

すべての利用者に対して、均一かつ質の高いサービスを提供するために、人材育成をどのように行うか。

伝えたいこと

未だ模索中で、他館へのアドバイスまでには至りません。

広島女学院大学図書館
学生ボランティアへの単位付与

学生数　1,867 名
館員数　専従 3 名、非常勤・臨時 6.5 名
蔵書数　260,000 冊
所在地　広島県広島市東区牛田東 4-13-1
ＴＥＬ　082-228-0392

内容

在学中に 40 時間、図書館でボランティアをすることにより 1 単位を取得できるサービス。

カリキュラム変更に伴い、廃止となった。2012 年度以降に入学した学生（現 1 年、2 年生）にはこのサービスは摘要されない。但し、2011 年度以前に入学した学生は単位取得可能となっている。

概要

対象者：学部生・大学院生
実施期間：2008 年 4 月～2015 年 3 月
実施場所：図書館
担当職員数：1 名

きっかけ

発案者：図書館

学内にボランティア関連の授業科目ができたことにより、図書館でもボランティアしている学生がいるということで始まった。

開始にあたって

準備の概要：ボランティア希望者 1 人毎のリスト（A4 サイズ）を作成。
広報：掲示物（館内）、図書館 HP、学内印刷物への記事掲載
費用：0 円

苦労したこと・工夫したこと

学生は授業の空きを利用してボランティアをするので、だいたいの予定を聞いておき準備をした。

学生は来たり来なかったり、予定外の日に来ることもあり、急なときは何をしてもらおうかとあわてることがあった。

始めてよかったと思うこと

・「ボランティアをすることにより図書館に関心を持つようになり以前より利用することが多くなった」、「職員がいろんな仕事をしていることがわかった」等と学生からの声を聴いたとき良かったと思った。

・メリットとしては、学生はカウンターにいる職員しか知らないことが多いと気づくことができた。

伝えたいこと

当館では学生アルバイトもいるので、やってもらうことを区別するようにしました。

法政大学図書館 ライブラリーサポーター制度

学生数　29,821 名
館員数　専従 26 名、非常勤・臨時 3 名
蔵書数　1,655,000 冊
所在地　東京都千代田区富士見 2-17-1
ＴＥＬ　03-3264-9575

内容

ライブラリーサポーターとは、学生の視点でより魅力的な図書館を作るために活動する「図書館学生ボランティア」である。

・人数：市ヶ谷 19 名、多摩 10 名、小金井 6 名（2013 年度）※活動はキャンパスごと

（以下の設問は多摩図書館ライブラリーサポーターについて回答）

・活動期間：毎年 5 月～翌年 1 月（任期 1 年間）
・募集：4～5 月（公募制）
・活動内容
　①懇談会（年 2～3 回）：学生と図書館職員で図書館サービスについて意見交換を行う。学生の図書館サービスへの評価を改善に活かす。
　②選書ツアー（年 1～2 回）：学生が書店へ行き、図書館で購入する図書を選ぶ。選書した図書は「ライブラリーサポーター選書本」として展示を行う。
　③その他：図書館業務体験、テーマ展示、読書会等。

概要

対象者：学部生
実施期間：2008 年 6 月～（2013 年度第 6 期）
実施場所：法政大学多摩図書館
担当職員数：2 名
スケジュール：
（選書ツアーのスケジュール）
・事前準備
　①日程調整（学生、書店）
　②学生へ選書基準等を説明
・当日
　9:45　書店前集合
　（出席確認、選書基準や注意点を再度説明）
　10:00　入店
　（書店員よりバーコードリーダーの使い方説明を受ける）
　10:10　選書開始
　（職員は学生の様子を写真撮影※書店と学生に事前に確認する）
　11:50　選書終了

12:00　解散

・展示

①選書データを書店から受領後、重複や発注可否を確認し、発注

②約1か月後、納品

③選書した学生に図書を貸し出し、図書紹介のPOPを作成してもらう

④「選書ツアー本」としてPOPとあわせて図書を図書館内で展示。

きっかけ

発案者：図書館事務部

学生の満足度を上げるための方策の一つとして、学生の図書館への働きかけを生み出し、それを図書館サービスの改善に活かす目的で始めた。

開始にあたって

準備期間：約3ヶ月

準備の概要：書店との打合わせ（選書ツアーに関して）、広報活動（図書館ホームページ、ポスター、ちらし、教員への働きかけ等）

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内）、図書館HP、twitter、学内印刷物への記事掲載。

費用・用途：16万円程度（選書ツアー図書購入費：約15万円、活動費：約1万円＝1,000円分図書カード×10人）

苦労したこと・工夫したこと

学生を集めるため、公募だけではなく、司書課程等の教員に学生を推薦してもらえるよう働きかけた。

始めてよかったと思うこと

・懇談会等で学生の図書館に対する率直な意見を聞くことができ、学生の視点を取り入れた図書館の改善を行うことができる。

・選書ツアーを通して、学生が求める図書資料の傾向を知ることができる。

・学生選書図書の展示や、学生が企画したテーマ展示を実施することで、学生の図書館利用を促進できる。

・活動を通して、学生が図書館に対する理解を深め、コミュニケーション能力や企画立案能力が向上するなど、学生の成長につながっている。

今後の課題は…？

・学生の主体性を引き出す運営方法や、職員の活動への関わり方

・活動における成果の評価方法の検討

・学内外への発信力の強化

伝えたいこと

より利用してもらえる図書館を作るには、利用者の視点を入れること、即ち学生の協力が不可欠です。すぐに結果は出ないので、試行錯誤を繰り返しながら学生の力を引き出すことが必要です。特に学生のボランティア精神に依存するところがあるので、如何に学生をやる気にさせるかがポイントです。学生と協働して魅力的な図書館を作っていってください。

立教大学図書館
ラーニングアドバイザー（LA）

学生数　21,246 名
館員数　専従 29 名、非常勤・臨時 9 名
蔵書数　1,780,000 冊
所在地　東京都豊島区西池袋 3-34-1
ＴＥＬ　03-3985-2628

内容

大学院生によるライティング支援。

図書館を上手に利用する学習の仕方やレポート・論文作成について、大学院学生がアドバイスするサービスを池袋図書館と新座図書館で行っている。

「レポートの書き方が分からない」、「レポートのための情報収集の仕方がわからない」そんな悩みを持つ学部学生の質問や相談に対して、ラーニングアドバイザーが自らの学習・研究経験をもとに図書館の資料を用いながら丁寧にアドバイスしている。

概要

対象者：主として学部生
実施期間：授業・試験期間（4～7 月、10～1 月）
　平日　12:00～17:00
　土曜　9:00～12:30（試験期のみ）
実施場所：池袋図書館 2F カウンター、新座図書館 2F「ラーニング･コモンズ」
担当職員数：3 名

きっかけ

発案者：図書館利用支援課

図書館における情報リテラシー教育支援の一環として、米国大学図書館での一般的なライティングサービスに倣い、学部学生を対象としたラーニングアドバイザー制度を導入した。

開始にあたって

準備期間：約 6 ヶ月
準備の概要：
・図書館運営の決議機関（図書館運営委員会）・部長会に提案・了承を経て、アドバイザーを採用。
・PC、プリンター、レファレンスブック、文房具などの備品準備。
広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、デジタルサイネージ（館内）、図書館 HP、学内印刷物への記事掲載
費用・用途：0 円
　※人件費別（人件費：時給 1,500 円×5 日×35 週×3 名）

苦労したこと・工夫したこと

アドバイザーと図書館スタッフ間でのコミュニケーションを密にし、アドバイザーへのサポート体制を強化した。

始めてよかったと思うこと

レファレンスカウンターにはなかなか敷居が高くて相談に訪れない学生にも、気軽に相談にのってもらえる窓口の一つを用意でき、利用者の多様なニーズを吸い上げることが出来ている。

今後の課題は…？

利用者数の延びは少ない。ある一定数の相談者ニーズに丁寧に応えるとともに、学部教育と連携してこのサービスの活性化を図っていくことが今後の課題である。

伝えたいこと

「ライティング支援」を図書館で行う意義とコンセプトを明確にすることが大切だと考えます。本学では、添削や内容に踏み込んだアドバイス（教育的な指導）は行わないことを前提にしています。

また、サービス開始当初はジェネラルな存在として当サービスを位置づけたため、アドバイザーの研究分野をあえて公開してこなかったという経緯があります。

その後導入した新座キャンパスでは、学部の要望に合わせて（専門知識が求められる分野であるため）、専門的な内容に特化した支援も行っています。

サービスの在り方は、利用者のニーズにあわせて柔軟に対応していく必要がありますが、アドバイザーと図書館スタッフがコミュニケーションを密にし、常にサービス内容と実態を確認していくとこが重要だと考えます。

立命館大学図書館
学生ライブラリースタッフ

学生数　39,782 名
館員数　専従 19 名、非常勤・臨時 15 名
蔵書数　2,947,000 冊
所在地　京都府京都市北区等持院北町 56-1
ＴＥＬ　075-465-8217

内容

図書館の運営に不可欠な配架や書架整理など基礎的な業務と学生ライブラリースタッフ（以下、LS と表記）が主体的に行うプロジェクト業務（図書紹介や館内ポスター作成など）の主に 2 つの業務を行っている。詳細な業務内容については下記サイトを参照。
（http://www.ritsumei.ac.jp/acd/mr/lib/staff/library_staff.html）

概要

対象者：すべての利用者
実施期間：2001 年 12 月～
実施場所：図書館内
担当職員数：4 名（衣笠キャンパス 2 名、びわこ・くさつキャンパス 2 名）

きっかけ

発案者：図書館サービス課
2001 年に学生の「学びと成長」を実現させ、基礎学力の充実、意欲と力のある学生の成長と進路・就職における高い水準での実現を図るため、LS 制度を導入することとなった。

開始にあたって

準備期間：約 1 年
準備の概要：
・毎年 11 月に新人スタッフを採用。数ヶ月前から採用する人数、広報等を大学職員が検討する。
・新人スタッフの研修はプログラムや資料、講師などすべてを LS が行っており、その準備も数ヶ月前から LS によって実施。
・11 月以降は LS が研修・試験を実施し、大学職員で新人スタッフの進捗状況を管理する。
広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内・館外）、放送（館内）、図書館 HP、学生が閲覧する Web 上の掲示板
費用・用途：大学予算（配架や書架整理などの基本的な業務に対して支払う費用が大半）

苦労したこと・工夫したこと

大学側で意欲的な学生を採用し、その後の研修においてはLSが主体的に研修の準備･実施を行うようにしている点。

研修の準備を通じて、上期生から下期生へ知識やノウハウの伝承が行なわれ、主体的に組織を引っ張らなければならないという意識の醸成を図ると共に、研修を通じてピア・ラーニングを実践している。

始めてよかったと思うこと

・LSがガイダンスを実施したり、図書館HPの一部を運営したりといった姿を図書館利用者の学生に見せることで、学生の活動・学習姿勢を刺激することに繋がる。
・LS自身も業務を通じて成長しており、主体的に行動する意欲の高い学生の創出に繋がっている。

今後の課題は…？

主体的な活動を実践し、新たなことにチャレンジする意欲的な集団を目指すと共に、業務効率を意識し、質的高度化を図っていける集団作りを大学職員が支援する必要があると考える。

伝えたいこと

学生スタッフ制度を導入する目的を明確にしておく必要があります。

図書館業務を業者に委託している場合、委託業者との業務内容の切り分けを図る必要があるが、どういった目的で制度を導入したかによって学生スタッフが行う業務内容も大きく変わってきます。

また、学生に業務をこなしてもらう際には細かなマニュアルの整備も不可欠です。

和光大学附属梅根記念図書・情報館

Let's Read Project

学生数　3,195 名
館員数　専従 11 名、非常勤・臨時 4.8 名
蔵書数　500,000 冊
所在地　東京都町田市金井町 2160
ＴＥＬ　044-989-7494

内容

本や読書を媒介としたさまざまな活動を、図書・情報館と学生が協働して企画・運営している。活動内容としては、蔵書を利用した企画本棚、夏休みを利用した国立国会図書館や他大学図書館、古書店などの見学ツアー、学生編集による機関紙「Counter」の発行、新入生に読ませたい本を選ぶための選書ツアー（紀伊國屋書店新宿本店）、年間活動をまとめた冊子「LRP レポート」の発行、知的書評合戦「ビブリオバトル」の開催等が挙げられる。

概要

対象者：学部生、大学院生
実施期間：2008 年 7 月～
実施場所：和光大学附属梅根記念図書・情報館（2011 年 12 月より館内に LRP ルーム設置。以降は学生メンバーの活動は LRP ルームを中心に行う）
担当職員数：3 名（2013 年現在）
スケジュール（選書ツアー当日）：
・選書ツアーを依頼している書店前集合。
・事前に分けたグループごとに選書をする。グループごとに分野、金額を決めている。
・選書後集合し、それぞれ選んだ本をプレゼンテーションして、意見交換。たとえば「新入生歓迎本」というテーマであれば、そのテーマにふさわしい内容であるか、全体で選び直す。
・選んだ本を書店に納品依頼（および重複調査）し、選ばれなかった本は戻す。

きっかけ

発案者：学生企画は発足以前より図書館として検討していた。選書ツアーは図書館内の選書委員会（2008 年当時）。現在は LRP ワーキングメンバーが担当。

2004 年より和光大学内部における図書館の存在意義を高め、ひいては、「この図書館を社会的に高く評価される図書館に」という目標を掲げて、さまざまな取り組みを進めてきた。学内外の組織や人々との連携を模索しながら、シンポジウム、講演会、講座、冊子の発行、各種ガイダンスなどを実現。

さらに学生をもっと主体的に図書館と関わらせるための仕組みができないかと検討する中で、2008 年 5 月に選書ツアーが提案された。この選書ツアーをきっかけに学生の輪を広げていこうと、会の名称を「Let's Read Project」として 2008 年 7 月に立ち

上げた。「本を読むということ、その醍醐味をほかの誰かと分かち合うということ、図書館という空間をまるごと味わうということ—そんな、ちょっとぜいたくでステキなことが身近なものとなるように…（HP より抜粋）」と呼びかけた。

開始にあたって

準備期間：約 1 ヶ月

準備の概要：2008 年 7 月初旬に職員の LRP ワーキングを立ち上げ、LRP の目標、当面の活動内容計画等について話し合った（事前に大枠の計画を立てていた）。7/7 より学生メンバー募集。ポスター等には「メンバー募集」「お気に入りの本棚を作りませんか」「選書ツアーに行こう」と呼びかけた。7/16 申込締切、同日昼休みに学生メンバーのミーティングを開き、7/23 第 2 回目のミーティングで選書ツアーの日程等（8/19、8/29）を決定した。

広報：掲示物（館内・館外）、チラシ（館内）、デジタルサイネージ（館内）、図書館 HP、メール、学内印刷物への記事掲載

苦労したこと・工夫したこと

- 学生メンバーのミーティングを、昼休みにランチ付きで実施した。
- 選書ツアーに気軽に参加してもらうため、ポスターを作成し「図書館のお金で本が買える」ということを前面に出し、参加を促した。
- 心当たりのある教員のゼミにも声をかけてもらった。
- 書店（紀伊國屋）の協力を得て、店内で学生が選書後に、複本をチェックしていただいた。
- 1 回目は書店の角で学生同士プレゼンをさせたところ白熱し、書店の担当の方がバックヤードを用意してくださった。互いに講評しあうことで、より内容のある選書を行うことができただけでなく、学生同士の距離も縮まった。
- 事務室内の選書コーナーの一部を、メンバーのミーティング・作業の場（「部室」のような場所）として提供した。作業道具などを用意したこともあり、作業がしやすくなった。

始めてよかったと思うこと

- 選書ツアー：普段職員が選書しないような本を選書できる。「学生が選んだ本」ということで、新入生への訴求力も高い。利用促進の面で学生の視点を取り入れて選書できる。
- 企画展示：職員が思いもよらないユニークな視点から、既存の蔵書を振り返ることができる。
- 広報：機関紙「Counter」は学生独自の視点による自由な紙面構成で、図書館に親しみを持ってもらい、利用者にとっての図書館への「敷居」を低くする。年 1 回発行の活動報告集「LRP レポート」は、年間の活動記録になると共に、学内（新入生）、学外向けへの広報として利用している。
- 見学ツアー（夏休み開催）：他の図書館を見学することによって、学生と共に展示方法や資料について学ぶことができる。
- ビブリオバトル（おすすめの本を 1 人 5 分で紹介する書評合戦）：館内の開かれたスペースで行うことにより、外部の目にも触れるようになってきている。LRP 内外の人に本や読書の楽しさにふれてもらうきっかけになる。人前に出て、プレゼンテーションをする機会になる。

今後の課題は…？

- 学生とともに、職員がさまざまなイベントを企画するために、学生同士、および学生と職員の交流に努めたい。
- LRP の活動は、学生主導を主としており、職員はサポートという運営スタンスを取っているが、職員のリードが必要な場合もある。いかにして学生主導を確立してゆくかが課題である。

伝えたいこと

- 学生主体の企画の継続性について、学生の入れ替わりがあるため、職員の働きかけが重要になります。また、内容の精査、活動の主体となる学生の育成など、学生が積極的に参加できる活動にするために職員からの仕掛けが必要です。
- 学生協働の活動というのは、日頃触れることの少ない利用者のニーズや感性に触発されるという大きいメリットがあります。反面、学生と協働する体制や時間に労力を奪われる、コミュニケーション不足のために活動が円滑に進まなくなる、ということにもなりかねません。職員・学生ともに、活動する意義を常に確認するとともに、モチベーションを高めて持続する心構えが必要だと感じます。